

編集後記

■編集委員

委員長

藤田 郁代

副委員長

立石 雅子

今井 智子

内田 信也

宇野 彰

勝木 準

倉内 紀子

城間 将江

鈴木 恵子

関 啓子

玉井 ふみ

深浦 順一

矢守 麻奈

今年の夏は西日本では集中豪雨による被害が続出し、からりと晴れた夏らしい日が少なかったように思います。6月にさいたま市で第15回日本言語聴覚学会(半田理恵子会長)が開催されてから早や2か月が過ぎましたが、今号には同学会における一般演題の事後抄録が掲載されています。同学会の一般演題は335題に達し、60個を超えるセッションで発表と熱い討議が繰り広げられました。

今学会のテーマは「言語聴覚士とはなにか、あるべき姿を再考する」であり、この根源的な問いを巡ってシンポジウムなどで興味深い討論が展開されました。ところで、わが国の言語聴覚士の年齢分布を見ますと20～30歳代が75%を占めています。この年代の方々は医療福祉制度の変革が急激に進む中で言語聴覚士になり、流動的に変化する制度やシステムに対応した専門性すなわち「言語聴覚士は何をなすべきか、何ができるか」をそれぞれの現場で模索し続けてきました。新しい仕組みの中で専門性を確立するには言語聴覚士のアイデンティティーを社会・臨床状況と関連づけて明確化、具体化し、専門的介入による効果を患者さんや他の専門職に示すことが求められます。それにはリサーチマインドをもって言語聴覚療法に取り組み、客観性、再現性、科学性に裏付けられた知見を蓄積していく地道な作業が必要です。今号の事後抄録からこのような試みが幅広い分野で精力的に行われていることを知ることができます。

今号には、前回の学会における特別講演「脳損傷からみることばのしくみ：よりよいリハビリテーションへのつながりとして」(大槻美佳氏：北海道大学)が掲載されています。失語症に関する新しい理論を言語聴覚療法に活用する道筋とヒントが丁寧に解説されています。また特別支援教育における言語聴覚士と教員の連携について検討した原著論文(中村達也氏)も掲載されていますので、併せてご一読ください。
(藤田郁代)

言語聴覚研究(第11巻 第3号)2014年9月15日発行

Japanese Journal of Speech, Language, and Hearing Research

編集・発行：一般社団法人 日本言語聴覚士協会(会長：深浦順一)

〒162-0814 東京都新宿区新小川町 6-29 アクロポリス東京 9 階

(☎ 03-6280-7628 FAX 03-6280-7629) <http://www.jaslht.or.jp/>

Published by Japanese Association of Speech-Language-Hearing Therapists (JAS), Acropolis Tokyo 9F, 6-29 Shinogawamachi, Shinjuku-ku, Tokyo, 162-0814, Japan

©2014, Printed in Japan

制作・発売：(株)医学書院(代表：金原 優) <http://www.igaku-shoin.co.jp/>

〒113-8719 東京都文京区本郷 1-28-23(振替口座 00170-9-96693 番)

販売部直通 ☎ 03-3817-5659・5660(FAX 03-3815-7804)

印刷所 (株)アイワード ☎ 011-241-9341(FAX 011-207-6178)

広告申込所 (株)文京メディカル ☎ 03-3817-8036(FAX 03-3817-8044)